

国土防衛のために

馬場 要治（大正6年生まれ）

私が召集されたのは昭和20年1月13日、東部第23部隊（新発田）でした。当日、広々とした営庭には大勢の召集兵で驚いた。新潟県と山形県人が多かった。呼出しの声で第3中隊の前に整列し、早速兵舎入りて医務室にて身体検査、寒中、廊下で裸にされる。合・否で帰された者もあった。兵舎に入り驚いた事に兵器がないので、これで戦争なるものが出来るのかと、淋しい思いは私一人ではなかった。私の班は軽機関銃1丁に小銃3丁のみ、それも今出来のガタガタ物であった。衣類には「シラミ」の付いた物、私は矢本へ行くまで私物の衣類でした。

兵舎は2階建てであったが、最初に召集者のみの室は板ばりで2段式になって、夜中に起きると床に入るのに一苦労するくらい大勢入室。13日の夕食後、中隊当番が中央廊下で大声で、今から呼ぶ人は14日朝食後中隊事務室に集合してください。さて帰されるものかとも思った。集合したのは5名、人事係が、君達はこれから留守隊要員だ、と言われ、私には、2月1日に初年兵が入るのでその教育係をやるように、当時は19歳の者が半分位で繰上げ徴集であった。

私の受持ちは35名でした。2階の部屋に入ると2、3日前に私達が旅館にいる時に夏衣を着た兵隊がたくさん出て行ったのを見た。室はガラガラで勤務に付くものが少なく困った。

15日にも召集があったが私の隊へ知人が来なかった。私共と召集された方々は朝鮮、満州の帰りの人が大勢で、たぶん北朝鮮行きでないかと思われる。

23日夜、下階の召集兵が静かにして出陣して行き、残留者で営門まで見送ったが、やはり朝鮮へ行った。

その後四月に入り各地へ警備に出るようになって、私共の隊は仙台地方の警備として、護仙第2204部隊として出陣し、残留者はアヤメ部隊となり、4月25日正午、臨時列車で余目を回り石巻経由で仙山線の東名駅で下車、東名海岸で私たち40名、当地の警備の任となりました。

ここで2日間、今度は松島海軍航空隊の後方にある矢本町柳木台と言う部落に行くべく行軍でここに到着。海岸線には飛行場があり、ここに兵隊が多数駐在しておりました。私共の所まで田圃で小高い山々があり、直線で6六キロメートル位あったかと思われます。最初は巡査駐在所や飛行機の部品の倉庫等に入り、5月に入り裏の山に入り敵前上陸に備えて陣地を造る事になり、山の中腹に松林の中に40名位入る小屋を造り、屋根は農家より藁を貰って「ノマ」を編んで雨よけにし、山の中腹のため雨水よけに縁の下を高く、その小屋が私共の兵舎にした。隊長は山下の区長宅で人事係は民家を借り、私共下士官は別に小さな小屋を池の土手に造って、ここで住み、食事は最初の部落の倉庫内で炊事して、初年兵達はここから運んで来るのも一苦労でした。

長期戦で、私は「ワラ」で造った八バキゲートルの代わりに使用、また編上靴を地下足袋の代用、これで5月中旬より山の下から海岸線为目标にして銃眼を掘る事になり、250キログラムの爆弾なら深さ13メートルあれば破れないとの事で、これにより3か所に穴を掘り始める。私の所は土は柔らかいが落盤が多く困った。外泊して氏神様に依頼してお札を頂き、穴に掲げて無事を

祈る。

6月中旬、釜石^{かまいし}地方に敵船が来て砲弾が打ち込まれたとの情報で毎夜交代で一生懸命に、土は藁のモッコに入れて外に運び出す。昔の作業と変わりなかった。

艦載機^{かんさいき}が飛んで来るようになって、穴と土を偽装するのも一苦労した。私の山では3か所割当てられて第1は馬場、第2は猪狩、第3は荒尾と、第3は石が多く固かったので徴用者の石屋さんが手伝いをやる。7月に入り時々艦載機が飛んで来ては旋回して帰り、時には田草取りの老婆^{らうば}が1人亡くなった。また飛行機を見ていた者も亡くなった。

穴を掘って、木材で囲うのが間に合わず、穴が深くなると落盤が危険だった。昔のような作業でなかなか完成することの出来ない心苦しさだった。深くなると暗くて困り、カイバイトランプを借りて掘る。私は穴に入ったきり休みと食事以外は穴の中で掘り方でした。苦しい思いだ。

8月15日の放送も皆良く聞き取れなかった。私は監視に行き参加できず、夕方まで終戦を知らなかった。次の日には落胆して1日休み、次の日から命令の来るまで農家へ手伝いに行っても来た。8月下旬頃に徴用者の^{ちようようしや}宿舎の学校の体育館が空いたので山から久しぶりに引越し、9月9日までここで休養やらお手伝いをして、8、9、10日の中で帰家する事になり、9日に部隊の方に別れて矢本駅まで来て私共敗戦兵を迎えてくれたのは、なんと石灰同様の^{むがい}無蓋貨車であった。これに10名位ずつ乗る臨時列車だった。上空には米兵が我々の銀河と言う飛行機で、しかも低空して「ハンカチ」をふって見送ってくれるではないか。残念だ残念だと言って負けた者、涙が出た。引落しかつたのは私だけではなかった。あのことを思いペンを走らせて涙が浮かんできました。

二度と戦争なんてするものではありません。こんな苦しい思いは私共で終わりです。

部落方へ^{えんのう}援農で行ったお宅と三代目のお付き合いをしております。矢本へ3回程伺い、2回目ですか、私共の掘った山へ登ってみましたら、皆廃山と化しておりました。また今から7年前位にも矢本町へ伺い、今でも文通を交わしております。